

## 第六二回卒業式式辞

皆様、おはようございます。本日、久留米大学附設高等学校は、第六二回の卒業証書授与式を迎えました。六二回生の皆さま、おめでとうございます。保護者の方々も、本当に長い間、お子様を支えて来られました。本日のお子様の晴れ姿、さぞやお慶びと存じます。おめでとうございました。

また、この場には、卒業生の皆さんを寿ぐべく、ご多忙の中、学校法人久留米大学神代正道理事長、久留米大学永田見生学長、久留米大学附設高等学校同窓会長谷川望生会長、久留米大学附設高等学校・附設中学校後援会藤崎敬介会長を始め、退職された恩師の先生方を含むご来賓の方々のご列席になっておられます。ご来賓のみなさま、ありがとうございます。

さて、卒業証書を授与される生徒諸君の中には、わたくしと共に、六年の間、ずっと附設で過ごした人もいれば、三年前から附設で学んでいる人たちもいます。六年前は、丁度、久留米大学創立八〇周年の行事がいろいろと執り行われており、また、わたくし自身、中学校や高等学校、特に、附設の校長がどういう役回りを演ずべきか全くわかっていなくて、皆さんとの関係性の確立の仕方に反省すべき点多々あったように思います。

高校から加わった諸君も加え、皆さんは、まさに、附設が変わって行く三年間をすべて体験しました。皆さんは、全員、二号館という附設の古い校舎を知っています。中には、一号館にあった昔の校長室を知っている人もいるでしょう。皆さんは、新校舎建築工事中の現場囲いのパネルを知っています。もちろん、完成した新しい校舎を知っていますし、東棟に全部の学年がいた時期を知っています。東棟を利用した初めての文化祭は出来ませんでした。新校舎全部を使ったのは皆さんが最初です。そして、附設中学校が共学化され、中に女子生徒がいるようになった時期を知っています。こういう機会に遭遇するということはなかなかないことですが、皆さんは、何というか、ものごとは変わるのだ、変えられるのだという実感が身に着いたのではないのでしょうか。

わたくしの卒業証書授与式の式辞も六回目になります。毎回、違う話をしようと心がけていますが、過去の分を読み返してみると、われながら、なかなかいいことを言ってきたな、と思います、これ以上違うことを言おうとするのも難しいような気がします。実際、みなさんがこれから直面することになる世界や日本、社会や地域の状況がそんなに急に変わるわけではありないうとすると、そうそう無理に違ったことを言う必要もないかもしれません。しかし、式辞というものは、そもそも、その年々の卒業生に対する敬意を表すものでもあります。これからの日本は今まで以上に非常に困難な状況に陥るのかもしれない、そういう

ところに皆さんは出ていくことになるわけですから、そこで、どう心掛けて進んでいけばいいのか、これは皆さんご自身がそれぞれの課題に直面してから改めて考え直すべきことではありますけれど、この機会に、敬意と共にある種のヒントをわたくしという老人から皆さんに示せたら、とも思いました。

さて、昨年の式辞は、附設のホームページにあります。が、「グローバル人材」が、本来、世間で喧伝されているような安直な代物ではないことを説明しました。今回は、

どこに出ても通用する人間を目指してください

と申し上げます。昨年と同工異曲のようですが、そのためには、皆さんが育った日本という存在のどこに魅力があるのか自分なりに考えておくべきだということを廻<sup>めぐ</sup>って改めて考えてみる必要があります。何事も裏表あるのが世の倣いなので、自分たちで魅力に違いな  
いと思っていることが反発を招くことかも知れない、という点も踏まえるべきことではあり  
ましょう。

実は、感謝を忘れない、少なくとも、感謝するということの価値を知っているということとは、日本の、というか、日本人の魅力だと思います。実際、先日の冬季五輪のいくつかの場面で感じたことですが、一流選手は、行動でも言葉でも、本当に自然に謝意を表していました。オリンピック選手は、国の代表的な競技者という意味で、何というか、甲子園的な捉え方がされがちですが、考えるまでもなく、真正銘のグローバル人材であります。自然体での振る舞いが、そのまま日本人の魅力として受け取られるようになったという意味で、この人たちは、われわれが目指すべき姿の参考になると思います。「おかげ」とか「恩」ということばが日本語で非常に重んじられていることから察しが付くように、日本は、昔から、社会的に、感謝という非常に大きな価値を認めている国だと思います。もちろん、言うまでもないことですが、感謝に大きな価値を認めているのは決して日本だけではありません。しかし、日本がそういう国であるということは大いに誇りにしていることだと思えます。

一方、日本人は「ありがとう」ということばがなかなか言えない、つまり、謝意を声を出して表すことができない、という批判があります。「ありがとう」が声を発せない、とすれば、これは、電車やバス、あるいは人ごみの中をだまってすり抜けていくということと同じで、むしろ、日本人の社会性の表し方、あるいは、いわゆる「コミュニケーション能力」の問題だと思えます。やはり、こういう批判には適切に応えていかなければならないと思えます。躑<sup>ひと</sup>や習慣の問題のように見えても、表面的なことではなく、おのが魅力、あるいは、他人の魅力というべきものをきちんと分析して理論化しておくべきだというのが、わ

たくしの申し上げたいことの背後にはあります。もちろん、分析だ、理論化だ、というのは、いわば、哲学者のなすべき仕事であって、皆さんやわたくしのような一般人は、逸話的なものでいいので、とにかく日本の魅力について考えるので十分だ、と思います。

オリンピックと言えば、先日の、東京五輪の招致の際に、「お・も・て・な・し」というのが話題になったではないか、という考えが頭を過った人もかなりいるのではないのでしょうか。「お・も・て・な・し」は「おもてなし」のアーティキュレーションをはっきりさせただけとして、ここで、「おもてなし」について考えてみたいと思います。「おもてなし」は日本の魅力と言ってよいのでしょうか。他国には「おもてなし」に相当する行為はないのでしょうか、たとえば、英語にホスピタリティという語があるように、どの国にもあります。「気配り」とか「心遣い」とかぶせてみても、これもケヤリングなどと、きちんとあります。「おもてなし」の心というものは、日本になれば問題ですが、あつたからと言って、日本だけのものではないことは知っておかなければなりません。いや、アメリカに行つたけど、アメリカ人には「おもてなし」の心などなかった、という人が、もしかしたら、いるかも知れません。しかし、その人は、アメリカ流の「おもてなし」の心を感じる事ができなかっただけかも知れないのです。そういうことがあるとすると、日本人の方で外国人に対し「おもてなし」の心で接しているつもりでも、全く通じていないということが起きているかも知れません。

どうしてこういうことがありえるのでしょうか。「おもてなし」の心でもホスピタリティでもいいのですが、一旦、日本やアメリカを離れたところでも成り立つ部分、つまり、共通というか本質的な構造の部分、を確かめて、その上で、それぞれの固有の特徴を生かすようにするのが本筋でしょう。

多分、一番の根本として共通するのは、相手に対する関心、そして、ここに来てくださってありがとう、という感謝から始まるのだと思います。わたくしの見るところでは、共通構造は、本来、もう少し、あつて、例えば、サービス精神とか、義侠心、あるいは、気働き、といったもの、まさに、為他ですが、そういうものが根底にあり、その上に、いわば表現上というか演出上の文化的な違いがあるようにみえます。ところが、この程度の当たり前の分析が意外とできておらず、思い込みでの決めつけが先行し、その思い込みからの外れ具合では、もてなす方も、もてなされる方も、ただただ感情を害するだけという結果さえ起きてしまいます。もてなす方ももてなされる方も、初対面のときは、相手側の「おもてなし」構造の特徴はわからないかも知れませんが、双方、ここが大事なのですが、いずれの方ともが、根底には共通構造があるものだと承知していれば、失敗の可能性は低くなるでしょう。「おもてなし」というものは初対面で成功しなければならぬものですが、自分たちで魅力だと思ひ込んでいるだけでは、魅力どころか、ただの押し付けに過ぎず、

かえって強い反発のもとになるかもしれません。

ところで、前の方で、どこに出ても通用する人間を目指してください、というのが今回の式辞の趣旨だと申しました。そうすると、皆さんは、そうか、もてなし上手になれ、もてなされ上手になれ、ということなのかと思われたでしょう。もちろん、そのことは大変大事なことです。が、これからの時代では、実際問題として、皆さんの多くは、他所の土地や、あるいは、いずれかの時点で、外国で暮らすことになるだろうと思います。特に、初めての外国暮らしのときは、その土地の流儀になかなか馴染めないものですし、自分が慣れ親しんでいるつもりのもものに比べて、要領が悪く見えたりします。このときは、皆さんは、どちらかと言うと、もてなされる方になっているわけですが、みなさんをもてなししているのは、人ではなくて、いわば、先方の社会や歴史、文化そのものになります。しかし、こういう機会に否定的な想いに浸ってはいけません。外国暮らしは面白くないし、決してうまく行きません。違いを見ることは非常に重要なのですが、違いが見えたら、その理由を考え、さらに、その効果や特徴を評価して、その土地の流儀の面白さをできるだけ見つけるようにしましょう。行った先が少しでも好きになるということがとにかく大事なのだと思います。とは言っても、べつたりになる必要はないし、恐らく、そうなってしまつては、その土地の人に自分の存在感や魅力をアピールできないでしょう。「おもてなし」に引き続いて、主客が共同して作り上げる麗しい世界の実現、それこそが本命であることを忘れないでください。

こうして、皆さんは、誰から見ても、どこの国に行つても、クールで、かつ、魅力的な人間に、自然に、成長していくことになりましょう。

六二回生の皆さん、皆さんの前には、実に、多くの困難が待ち受けています。先の読めない世の中でもあり、今に限らないことですが、最悪のことも想定して、自らを鍛え続けていくのは極めて当たり前のことです。皆さんの鍛錬の鍵、それは、人間としての魅力の増進を心がけること、それに尽きます。十年後、二十年後、あるいは、三十年後、と、皆さんの周りの人の輪がどんどん広がって行くことを心より期待しています。

本日は大変おめでとうございました。

平成二六年三月一日

久留米大学附設高等学校 校長

吉川 敦